様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１８２６５

研究課題名（和文）児童の攻撃性の構造関係と共感の関連についての幸福な加害現象からの検討

研究課題名（英文）An examination of the relationship between structural relations of child aggression and empathy, focusing on the phenomenon of happy victimization.

研究代表者
勝間　理沙（Katsuma, Lisa）

京都大学・教育学研究科・特定助教

研究者番号：５０５７２３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，まず，攻撃性の機能と形態から構造的に捉えた測定尺度の標準化のために妥当性し，質問紙の標準化を行った。次に，攻撃性と共感反応との関係について，攻撃性を構造関係から捉えた上で，先行研究の知見を再現した。さらに，攻撃性の高い個人がなぜ共感の機能低下を引き起こすのかということについて加害行動への感情帰属である“happy victimization（幸福な加害：HV）”に着目して調査を行ったところ，攻撃性と共感との関係におけるHVの効果が確認された。これらの結果から，攻撃性と共感との関係には，負の関連があり，その両者の関係にHVが影響していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
まず日本において，攻撃性の構造関係を測定し，それに基づいた研究はこれまでに皆無であり，本研究で開発された測定法を用いて攻撃性の構造関係に焦点を当てることで，児童期の攻撃性の理解をさらに深めることができるのではないかと考える。
またこれまでの攻撃性研究では，感情や感情処理の役割を検討した研究はいまだ少ない。本研究では，共感反応や“happy victimization（幸福な加害：HV）”と攻撃性との関連が見出されており，それを確かめる実証的な知見の一つとなりえたのではないかと考える。
今後本研究で得られた知見をもとに，攻撃性のタイプに応じた介入・予防法の考案へと寄与することが期待され

研究成果の概要（英文）：In the present study, first, the measurement scale that structurally captured aggression in terms of its function and form was standardized. Next,based on the structural relationship of aggression, the findings of previous studies on the relationship between aggression and empathic responses were replicated. Furthermore, to investigate why individuals with high aggression cause a functional decline in empathic responses, "happy victimization (HV)," which is the attribution of emotions to aggressive behavior, was focused and the effect of HV on the relationship between aggression and empathic responses were investigated. The effect of HV on the relationship between aggression and empathic responses was confirmed. These results suggest that there are negative relationships between aggression and empathic responses, and that there is an effect of HV on the relationship between the two.

研究分野：発達心理学，教育心理学，健康心理学

キーワード：攻撃性　共感　Happy victimization　児童

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年の攻撃性研究では，攻撃性をその発動の根底にある機能（underlying function；反応的，道具的）と，表に現れている形態（overriding form；顕在性，関係性）という観点から，それらを組み合わせて構造的にとらえることが提言され，それぞれの攻撃性から適応・健康上の問題との関連が再検討されるようになり，４つの攻撃性のサブタイプでは異なった関連を示すことが示唆されていた（Marsee & Frick, 2007; Prinstein & Cillessen, 2003）。より詳細な攻撃性の理解や対処・予防のために，攻撃性の構造関係に基づいた研究が必要であると考えられる。そこでまず，開発途中であった，児童に対して適用可能な攻撃性の構造関係を測定する尺度（勝間，2016）を標準化していく必要があると考えた。

また攻撃性研究では，その発動までに至るプロセスの理解については，社会的情報の処理を 6 段階に分けた円環モデルによる社会的情報処理（social information processing; SIP）理論（Crick & Dodge, 1994）という認知に焦点化した枠組みで検討が行われてきた。しかし近年では，感情が個人の意思決定に重要に関わっているというさまざまな理論や仮説（e.g., Damasio, 1994）が提唱されており，SIP 理論における感情や感情処理の役割を統合したモデルが提示され（Lemerise & Arsenio, 2000），攻撃性研究における感情の重要性が指摘されている。研究代表者の先行研究（勝間・山崎，2008，2009）では，攻撃性と共感や感情認知および共感関連反応との関連を見出したが，攻撃児が共感反応の低下に至るメカニズムを明らかにすることが課題となっていた。この課題について，“happy victimization（幸福な加害）”帰属に着目した。Arsenio（2006）によると，攻撃児が他者の痛みや損失に共感する過程について，攻撃性の高い子どもは，“happy victimization（幸福な加害）”帰属を持っており，その加害行為がもたらす明確な利益に対しては“ポジティブな感情（happy/less negative emotions）”を感じると予期（帰属）し，そのような自分のポジティブな感情を優先してしまう結果，他者の痛みや損失を気づけないために共感できないのではないかと指摘している。そしてこの傾向は特に道具的攻撃児に多いことを明らかにしている。そこで，攻撃性のサブタイプによる共感の機能低下の違いを happy victimization という感情帰属の観点から明らかにする必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究では，小学校 4～6 年生を対象として，児童がもつ攻撃性の構造関係を明らかにし，それぞれの攻撃性のサブタイプによる共感反応の違いや，各攻撃児の共感の生起メカニズムを感情帰属過程である happy victimization により明らかにしていくことを目的とした。さらに，本研究では，因果関係の同定についても言及したいと考えた。そのため，目的は次の 3 つを設定した；目的Ⅰ：攻撃性の機能と形態の構造関係を捉える尺度について妥当性検討を行う，目的Ⅱ：攻撃性を構造関係から捉えた上で共感との関係を検討する，目的Ⅲ：攻撃性の高い児童が，なぜ共感反応に歪みを持つのかを，happy victimization という加害行動に対する感情帰属との三者関係から明らかにしていく。

３．研究の方法

本研究では，前述の目的を検討するために 3 つの研究を行った。調査対象者は，小学校 4～6 年生の児童と，攻撃性構造関係の測定法の妥当性を検討するために（目的Ⅰ），その一部として児童の保護者にも調査を行った。

調査対象者の収集はアスマーク株式会社に依頼した。同社モニター登録者（成人）の中から小学校 4～6 年生の子どもがおり，関西近辺に在住しているもののみを選定した。選定された者の中で，当該調査内容，個人情報の保護，子どもの自己決定権についての説明に同意した者のみ，研究代表者が設けた調査会場に集まってもらい，集団形式で実施された。

なお，今回調査では十分なサンプル数を確保することができなかったため，研究②（目的Ⅱ）に関しては，以前に得られたデータと合わせて検討することとした。

４．研究成果

【研究①】

（1）目的

開発中の児童における攻撃性の機能と形態の構造関係を捉える尺度について妥当性の検討を行うことを目的とした。

（2）方法

①調査対象者

関西地方の小学校 4～6 年生 44 名（男子 25 名，女子 19 名，年齢：M＝10.93，SD＝.82）とその保護者 41 名（年齢：M=44.34，SD＝3.83）を対象とした。

②調査材料

1）攻撃性構造関係測定尺度：質問紙の構成尺度は形態（顕在性，関係性）と機能（反応的，道具的）であり形態項目 12 項目，機能項目 8 項目の順で回答を求めた。形態項目については，

それぞれの項目を“自分以外の人にふだんどのくらい行っているか”を，“まったく行わない（0点）”～“とてもよく行う（4 点）”の 5 段階で評定を求めた。さらに機能項目に対しては，“質問①（すなわち形態項目）で答えたことについて，それらのことを自分以外の人に行うとき，書かれている理由がどれくらいあてはまるか”を，“まったくない（0 点）”～“いつも（4 点）”の 5 段階で評定を求めた。攻撃性の構造関係による 4 つの尺度（反応的顕在性攻撃，反応的関係性攻撃，能動的顕在性攻撃，能動的関係性攻撃）の得点については，形態，機能項目の得点を合成して生成した。

2)場面設定法による共感反応測定:仮想的に設定された場面を使用する場面設定法を用いて，他者の悲しみの場面に対する感情認知および共感関連反応を測定した。場面については 3 つ用意した（A：ペットの死，B：友人との離別，C：大事な所有物の喪失）。それぞれの場面に対して，感情認知，エンパシー，シンパシー，個人的苦痛を問う 4 つの項目について，“ぜんぜんそうおもわない（1 点）”～“とてもそうおもう（5 点）”の 5 段階で評定してもらった。

3）保護者による子の攻撃性構造関係の評定：攻撃性の構造的関係から捉えた 4 つの攻撃性を表す項目を各 2 項目用意し，アンケートに協力している子どもがそれらの項目を“ふだんどのくらい行っているか”について，“とてもよく行う（4 点）”～“まったく行わない（0 点）”で評定してもらった。

③調査時期および手続き

調査時期は 2023 年 3 月であり，調査会社を通じて集められた児童および保護者に対して，集団形式で実施した。

（3）結果と考察

①全尺度の記述統計およびα係数

本研究で使用した攻撃性構造関係測定尺度，場面設定法による共感反応，親評定について，記述統計量とα計数を算出した（Table 1）。その結果，いずれの尺度もα計数が .6 以上となり，十分な内的一貫性を示した。

Table 1　全尺度の記述統計およびα係数

	n	M	SD	α係数
攻撃性				
形態：顕在性攻撃	44	3.20	4.48	.89
形態：関係性攻撃	44	2.39	2.69	.66
機能：反応的攻撃	44	2.82	3.16	.73
機能：能動的攻撃	44	1.23	2.28	.66
反応的顕在性攻撃	37	6.70	7.62	－
反応的関係性攻撃	36	5.97	5.80	－
能動的顕在性攻撃	38	4.47	7.18	－
能動的関係性攻撃	37	3.59	5.38	－
共感反応				
感情認知	44	13.64	1.77	.68
エンパシー	44	11.02	2.71	.70
シンパシー	44	12.26	2.68	.77
個人的苦痛	44	9.36	3.26	.84
親評定による攻撃性				
反応的顕在性攻撃	44	1.48	1.75	.78
反応的関係性攻撃	44	.70	1.07	.77
能動的顕在性攻撃	44	.82	1.30	.81
能動的関係性攻撃	44	.41	.84	.70

②攻撃性構造関係測定尺度と共感反応の相関

これまでの研究では，攻撃性と共感には負の関係があることが分かっている。そのため，収束的妥当性の検討のために，攻撃性構造関係測定尺度と共感反応との関係について，Pearson の相関係数を算出した。その結果，ほぼすべてにおいて中程度の負の有意な相関が見られた（r = -33～-.61，すべて p < .01）。唯一有意な相関が得られなかった能動的関係性攻撃とエンパシーとの相関係数は r = -.28, p = .09 となっており，サンプル数を増やすことによって有意になる可能性が示唆される。よって，攻撃性構造関係測定尺度の収束的妥当性が高いことが示された。

③攻撃性構造関係測定と保護者評定の相関

児童自身の攻撃性構造関係測定尺度とその保護者による攻撃性構造関係尺度の評定について Pearson の相関係数を算出した。しかし，すべての下位尺度において，有意な相関は得られなかった。親（保護者による）評定は，乳幼児期の研究においてよく用いられている。一方，児童期になると教師評定が用いられることが多い。今回の結果からは，特に攻撃性のような子のネガティブな側面を測定する場合，保護者による評定により妥当性を検討することは困難なことが示唆される。

本研究の結果から，攻撃性構造関係測定尺度については，十分な信頼性を備えており，共感反応との関係においては，十分な収束的妥当性を有していると言えるだろう。ただし，構成概念妥当性の検討として，引き続き，教師評定による検討を行うことが必要であろう。

Table 2　攻撃性構造関係測定尺度と共感反応の相関

	感情認知	エンパシー	シンパシー	個人的苦痛
反応的顕在性攻撃	-.58**	-.47**	-.47**	-.51**
反応的関係性攻撃	-.56**	-.33**	-.46**	-.34**
能動的顕在性攻撃	-.61**	-.44**	-.51**	-.55**
能動的関係性攻撃	-.57**	-.28+	-.44**	-.42**

**p < .01, +p < .10

【研究②】

（1）目的

攻撃性を構造関係から捉えた上で共感との関係を検討することを目的とした。

（2）方法

①調査対象者

研究①の調査対象者である関西地方の小学校 4～6 年生 44 名に，勝間（2017）で検討した公立小学校計 3 校に在籍する 4～6 年生 438 名を加えた，482 名を分析対象者とした。

②調査材料

研究①で用いた以下の 2 つの尺度 1）攻撃性構造関係測定尺度，2）場面設定法による共感

反応測定を用いた。詳細は研究①を参照。

③調査時期および調査手続き

研究①の調査対象者 44 名については，同様。勝間（2017）の調査対象者 438 名については，2016 年 1～3 月に調査協力の同意を得られた 3 校にて，学級ごとに集団形式で調査を実施した。

（3）結果と考察

①全尺度の記述統計およびα係数

本研究で使用した尺度の記述統計およびα係数を算出した（Table 3）。α係数の値はすべてα＝.60 以上であり，十分な内的一貫性があることが示された。

Table 3　全尺度の記述統計およびα係数

	n	Median	M	SD	α係数
攻撃性					
形態：顕在性攻撃	468	2.00	3.55	3.59	.81
形態：関係性攻撃	469	2.00	2.84	2.93	.77
機能：反応的攻撃	460	3.00	3.24	3.00	.73
機能：能動的攻撃	462	.00	1.24	2.09	.75
反応的顕在性攻撃	412	6.00	7.12	6.28	－
反応的関係性攻撃	408	5.00	6.29	5.65	－
能動的顕在性攻撃	279	5.00	5.83	6.05	－
能動的関係性攻撃	281	4.00	4.90	5.31	－
共感反応					
感情認知	425	15.00	13.85	1.62	.62
エンパシー	424	12.00	11.38	2.92	.79
シンパシー	424	14.00	13.18	2.15	.77
個人的苦痛	425	10.00	10.03	3.22	.84

②攻撃性構造関係尺度と共感との関係

共感反応の下位尺度毎に，各攻撃性得点の高低群×性の 2 要因分散分析を行った。分析に際して，各攻撃性得点の中央値によって高低群に分けた。その結果を Table 4 に示す。すべての共感反応において，各攻撃性と性の主効果が見られ，すべて攻撃性高群が低群より有意に低く，男子が女子よりも有意に低いことが示された。なお，すべての交互作用が有意ではなかった。つまり，構造関係から捉えた 4 つ攻撃性は，それぞれ共感反応を低めることが示唆される。よって，攻撃性と共感との関係において過去の知見を一部再現した。今後，攻撃性の違いによる共感反応との関係を詳細に分析する必要がある。

Table 4　各共感反応における二元配置分散分析（攻撃性×性）の結果

	低群		高群		主効果+		交互
	男子	女子	男子	女子	攻撃性	性	作用+
感情認知							
反応的顕在性攻撃	13.97 (1.52)	14.39 (.97)	13.29 (2.07)	13.85 (1.46)	13.17**	8.48**	.17
反応的関係性攻撃	13.82 (1.62)	14.40 (1.02)	13.34 (2.07)	13.84 (1.41)	9.59**	10.24**	.05
道具的顕在性攻撃	14.04 (1.33)	14.36 (.99)	12.87 (2.23)	13.73 (1.67)	17.50**	7.49**	1.59
道具的関係性攻撃	13.89 (1.61)	14.43 (1.02)	12.69 (2.23)	13.73 (1.62)	19.31**	13.32**	1.32
エンパシー							
反応的顕在性攻撃	11.70 (2.76)	12.52 (2.36)	10.46 (3.12)	11.22 (2.60)	18.61**	7.26**	.01
反応的関係性攻撃	11.33 (3.20)	12.57 (2.22)	10.58 (2.96)	11.25 (2.58)	12.57**	10.71**	.93
道具的顕在性攻撃	11.64 (2.88)	12.60 (2.44)	10.25 (2.95)	11.24 (2.65)	14.37**	7.22**	.00
道具的関係性攻撃	11.19 (3.39)	12.50 (2.49)	9.99 (2.79)	11.36 (2.57)	10.09**	13.23**	.01
シンパシー							
反応的顕在性攻撃	13.42 (1.92)	13.85 (1.67)	12.45 (2.61)	13.19 (1.83)	13.28**	6.93**	.51
反応的関係性攻撃	13.24 (2.06)	13.92 (1.60)	12.59 (2.53)	13.12 (1.86)	11.09**	7.65**	.11
道具的顕在性攻撃	13.48 (1.80)	13.73 (1.70)	12.03 (2.68)	13.00 (2.05)	14.78**	4.66*	1.63
道具的関係性攻撃	13.15 (2.17)	14.01 (1.45)	12.03 (2.61)	12.98 (2.04)	15.51**	11.04**	.02
個人的苦痛							
反応的顕在性攻撃	10.53 (3.30)	10.93 (2.84)	9.15 (3.12)	10.24 (2.88)	10.12**	5.26*	1.11
反応的関係性攻撃	10.29 (3.51)	11.16 (2.80)	9.12 (3.04)	10.09 (2.84)	11.83**	8.00**	.03
道具的顕在性攻撃	10.62 (3.28)	11.07 (2.77)	8.96 (3.16)	10.12 (3.12)	10.30**	3.91*	.78
道具的関係性攻撃	10.13 (3.80)	11.17 (2.98)	8.57 (2.97)	10.11 (2.97)	9.84**	9.64**	.37

**p<.01，*p<.05，+はF値。

【研究③】

（1）目的

攻撃性の高い児童が，なぜ共感反応に歪みを持つのかを，happy victimization という加害行動に対する感情帰属との三者関係から明らかにすることを目的とした。

（2）方法

①調査対象者

研究①の調査対象者である関西地方の小学校 4～6 年生 44 名を調査対象者とした。

②調査材料

攻撃性と共感反応については，研究①で用いた 2 つの尺度 1）攻撃性構造関係測定尺度，2）場面設定法による共感反応測定を用いた。詳細は研究①を参照。

3）場面設定法による“happy victimization（幸福な加害）”を測定：さらに，加害行動に対する感情帰属である“happy victimization（幸福な加害）”を測定するために，場面設定法を用いた。先行研究（Arsenio, Adams, & Gold, 2009; Hasegawa, 2018）を参照し，被害者 A さんと加害者 B さんが登場する場面を 3 つ用意した（Ⅰ：水飲み場で割り込まれる，Ⅱ：遠足に持ってきたドーナツを盗まれて食べられる，Ⅲ：トイレの落書きを嘘をつかれて自分のせいにされる）。それぞれの場面に対して，加害者 B さんの感情を尋ねるため，“（各場面の後）B さんはどう感じていると思うか，自分自身が加害者 B さんだったらどう感じていると思うかに対して，“とても悲しい（-2 点）”，“悲しい（-1 点）”，“うれしい（1 点）”，“とてもうれしい（2 点）”の 4 段階で評定してもらった。さらに，それぞれの評定についての理由も尋ねた。

③調査手続き

研究①と同様。

（3）結果と考察

①加害者および自分自身についての“happy victimization（幸福な加害）：HV”の記述統計とα係数

加害者および自分自身についての HV の記述統計とα係数を算出した（Table 5）。加害者においても自分自身においても HV のα係数は.70 以上となり，十分な内的一貫性を示した。

Table 5　加害者および自分自身についてのHVの記述統計とα係数

	n	Median	M	SD	α係数
加害者に対するHV	42	3.00	2.05	2.91	.78
自分自身に対するHV	41	-3.00	-1.59	3.37	.87

②攻撃性構造関係尺度，共感反応および加害者・自分自身における HV の 3 者関係の検討

加害者・自分自身の HV 得点を中央値で高低群に分け，それぞれの群での攻撃性と共感反応の Pearson の相関係数を算出した（加害者に対する HV は Table 6，自分自身に対する HV は Table 7）。その結果，加害者に対する HV においても，自分自身に対する HV においても高低群で攻撃性と共感との関係に一部違いがあることが示された。加害者に対する HV 高低群での違いが顕著であったのは，攻撃性と感情認知との関係であった。高群では，攻撃性と共感反応とに有意な負の相関が示されたが，低群では有意とはならなかった。つまり，攻撃性と感情認知の関係において，加害者に対する HV の調整効果があることが分かった。この調整効果は，自分自身に対する HV においても一部示された。加害者においても自分自身においても，加害行動に対してポジティブな感情を示すものは，攻撃性が感情認知を阻害している可能性が示唆される。ただし，本調査については，サンプル数を十分に確保することができなかったため，解釈は限定的ではあるため，今後サンプル数を増やした上で，それぞれの攻撃性の違いや HV の媒介効果についても検討していく必要がある。

Table 6　加害者に対するHV高低群毎の攻撃性構造関係測定尺度と共感反応の相関

	高群（N = 21-23）				低群（N = 11-14）			
	感情認知	エンパシー	シンパシー	個人的苦痛	感情認知	エンパシー	シンパシー	個人的苦痛
反応的顕在性攻撃	-.71**	-.43*	-.47*	-.50*	-.23	-.58*	-.49^{+}	-.61*
反応的関係性攻撃	-.61**	-.17	-.43*	-.28	-.35	-.78**	-.57^{+}	-.61*
能動的顕在性攻撃	-.74**	-.43**	-.50*	-.58**	-.30	-.47^{+}	-.54*	-.50^{+}
能動的関係性攻撃	-.61**	-.15	-.39^{+}	-.39^{+}	-.40	-.62*	-.59*	-.49

$^{+}p < .10$, $^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

Table 7　自分自身に対するHV高低群毎の攻撃性構造関係測定尺度と共感反応の相関

	高群（N = 9）				低群（N = 25-27）			
	感情認知	エンパシー	シンパシー	個人的苦痛	感情認知	エンパシー	シンパシー	個人的苦痛
反応的顕在性攻撃	-.77**	-.38	-.30	-.40	-.17	-.43*	-.45*	-.56**
反応的関係性攻撃	-.62	-.30	-.20	-.26	-.28	-.24	-.47*	-.33
能動的顕在性攻撃	-.78*	-.31	-.30	-.50	-.21	-.39*	-.50**	-.56**
能動的関係性攻撃	-.60	-.16	-.14	-.39	-.30	-.26	-.49*	-.39^{+}

$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$

＜引用文献＞

Arsenio, W. F. (2006). Happy victimization: Emotion dysregulation in the context of instrumental, proactive aggression. In D. K. Snyder, J. Simpson, & J. N. Hughes (Eds.), *Emotion regulation in couples and families: Pathways to dysfunction and health* (pp. 101–121). American Psychological Association.

Arsenio, W. F., Adams, E., & Gold, J. (2009). Social information processing, moral reasoning, and emotion attributions: Relations with adolescents' reactive and proactive aggression. *Child Development*, *80*, 1739-1755.

Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, *115*, 74-101.

Damasio, A. R. (1994). *Descartes' Error: Emotion, Reason, and Human Brain*. William Morris Agency, Inc, New York

Hasegawa, M. (2018). Developing moral emotion attributions in happy victimizer task: Role of victim information. *Japanese Psychological Research*, *60*, 38-46.

勝間理沙（2016）．児童期における攻撃性の構造的関係測定尺度の開発―尺度原版の完成と信頼性および妥当性の予備的検討―　発達研究（発達科学研究教育センター紀要），**30**，41-52.

勝間理沙（2017）．児童期の攻撃性の構造関係が共感関連反応に及ぼす影響　日本発達心理学会第 28 回大会ポスター発表

勝間理沙・山崎勝之（2008）．児童における 3 タイプの攻撃性が共感に及ぼす影響　心理学研究，**79**，325-332.

勝間理沙・山崎勝之（2009）．児童における 3 タイプの攻撃性と共感関連反応との関係　日本心理学会第 73 回総会ポスター発表

Lemerise, E. A, & Arsenio, W. F. (2000). An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. *Child Development*, *71*, 107-118.

Marsee, M. A., & Frick, P. J. (2007). Exploring the cognitive and emotional correlates to proactive and reactive aggression in a sample of detained girls. *Journal of Abnormal Child Psychology*, *35*, 969-981.

Prinstein, M. J., & Cillessen, A. H. (2003). Forms and functions of adolescent peer aggression associated with high levels of peer status. *Merrill-Palmer Quarterly*, *49*, 310-342.

坂井明子・山崎勝之（2004）．小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性，妥当性の検討　心理学研究，**75**，254-261.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 勝間理沙	４．巻 1057
２．論文標題 いじめ再考ー海外のいじめ問題対応・アメリカ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 児童心理	６．最初と最後の頁 102-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Lisa Katsuma
２．発表標題 The development of measurement scale for the structural relations of aggression in Japanese children
３．学会等名 The 32th International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 勝間理沙・鈴木国威
２．発表標題 情動粒度の測定に関する予備的研究
３．学会等名 日本心理学会第85回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 勝間理沙
２．発表標題 攻撃性を構造関係で捉える
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会，ラウンドテーブル「攻撃性の発達研究」話題提供
４．発表年 2022年

１．発表者名 勝間理沙
２．発表標題 攻撃性研究におけるCU特性への着目－攻撃性との関連からの考察
３．学会等名 日本発達心理学会 第32回大会
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 勝間理沙
２．発表標題 道徳性とは何か？：道徳性再考（2）：新領域での研究から道徳性概念の本質を考える
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 勝間理沙
２．発表標題 道徳性とは何か？：道徳性再考（1）ー発達的観点から現在の道徳「教科化」を考えるー
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 勝間理沙
２．発表標題 児童における攻撃性の構造関係測定尺度の因子構造 および共感への影響の検討
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関